



「KOMABA DAY」は月に一度実施している日で、世界で起こっている様々な問題に子どもたちが触れる機会を作っています。また、同日は募金箱も設置します。集まった募金は災害などの緊急支援や KOMABA の開校以来、その活動を応援し続けているトータルペインター・ミヤザキ ケンスケさんのプロジェクト OVER THE WALL に役立てられます。なお楽しみながらの活動を目指しているため、「KOMABA DAY」では講師は私服で授業をし、生徒は授業中の飲食を可としています。

マダガスカル 干ばつで飢餓が深刻化

国連が支援を呼びかけ

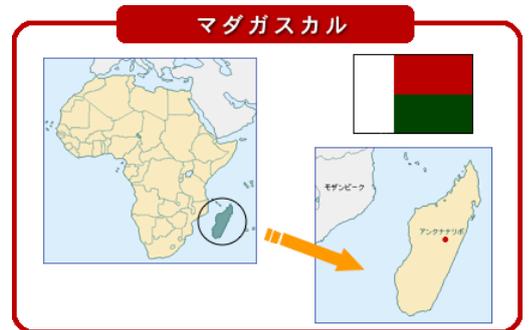
アフリカの島国、マダガスカルでは厳しい干ばつによって 100 万人以上が食料不足に陥るなど飢餓が深刻化していて、現地を視察した国連機関のトップは「紛争もない場所で静かな悲劇が起きている」として、国際社会の支援を呼びかけました。

マダガスカル南部では、厳しい干ばつが 3 年連続で続いたことで農作物がとれず、人口の 114 万人が深刻な食料不足に陥っています。WFP=世界食糧計画のビーズリー事務局長は今月中旬に現地を視察したあと 22 日、オンラインの記者会見を開き、現地の状況を説明しました。

それによると、南部で食料不足に陥っている人のうち、およそ 1 万 4000 人は世界で最も深刻なレベルの食料危機にあたるということで、ビーズリー事務局長は「飢餓で子を失った親もいた。食料の配給所には骨と皮ばかりの子どもたちが集まっていた」と述べて窮状を話しました。

また、現地では新型コロナウイルスの感染拡大によって仕事を失う人が増えるなど影響も出ていて、生活のために土地を手放す人も出ています。

ビーズリー事務局長は、厳しい干ばつの背景には気候変動もあると指摘し「紛争もない場所で静かな悲劇が起きている。気候変動の原因をつくっていないマダガスカルの人たちが気候変動によって命を奪われている」として、国際社会の支援を呼びかけました。



KOMABA のパンフレットの表紙にも描かれているバオバブの木が有名。



食料の配給所に集まる人々

食糧不足の原因は様々です。紛争や自然災害、バッタの大量発生、新型コロナウイルスの影響など、色々な原因が複雑にからみあっています。シンガポールや日本で暮らしている私たちにとって、飢餓（きが）の問題は一見すると「遠い」できごとと感じられるかもしれませんが、これは決して「ひと事」ではありません。私たちが直接何か行動をすることは難しくとも、自分の身近なところから考えることを始めることはできます。例えば、「フードロス」の問題についてあらためて考えてみましょう。シンガポールや日本で余った食べ物がそのまま現地に届けられるわけではありませんが、自分の生活の中でじっくりと問題に向き合った経験が、将来次の活動や選択に大きく関わってきます。食卓から世界について視野を広げてみましょう。

(川口)